
愛しき夜

星空の闇に消えた男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しき夜

【Nコード】

N6212G

【作者名】

星空の闇に消えた男

【あらすじ】

外は雨。すでに闇に包まれた街中のホテルで霧彦はある日、歳若く美しい娼婦と出会い、彼女の事をまるで恋人のように好きになってしまった。人を信じて疑わない性質「たち」の純朴な青年、霧彦は、自らの想いをその娼婦に対し懸命に伝えようとするが…

「救ってあげたい、君を……………」

「……えっ……………」

しとしとと物憂げに冷たい雫が、悲しみを誘うように降り注ぐある週末の夜、一人の純朴そうな青年と、優婉な顔立ちをしてどこことなく神秘的な雰囲気を持っている若い女が、今日はまもなく終わりを迎えてしまうであろうゆったりとした時間を一緒に過ごしていた。別れを告げる時間まであと三十分と迫っていた。

「ごめんなさい。それは貴方にはできないわ。遊びじゃないのよ、こっちは……………」

「でも君のやってる事は……………」

(……………不幸な罪の償いじゃないか)

そう言葉にして叫びたかった。けれども…………

「じゃあね。また出会う機会があったらゆっくりとお話でもしながら楽しみましょう」

淑やかな雰囲気似合わず、少々ラフなピンクのパーカーワンピースに着替えた彼女を見ても、どこかまた彼の心を捕らえて離さないものがあつた。

「じゃあね」 愛嬌いっぱい微笑(えみ)を頬に作り彼女はそそくさと、しかし軽い足取りで部屋から出ていった。

(次はどんな男のところへ向かうんだろう。口過ぎの為に、いつまで偽りの愛を与えてゆくつもりなんだ……………)

彼女との甘い時間が終わり、霧彦は未だ乾いた音を立てながら降り続く秋霖の夜を、窓越しに物悲しげな眼で見つめた。目と鼻の先に映える街のネオンは、水と混ぜ合って溶けた絵の具のように雨に滲んで、やわらかい輝きを放っていた。

(いったいいつまで……………)

ついさっきまで、僅かではあるがミレイと名乗る女と過ごした艶

めかしい時間。その品のある美しさも多分に漂う容姿だけでなく、どこか神秘的な雰囲気にも包まれた彼女をめいっぱい熱い身体とハートで抱きしめた甘く切なすぎた時間。今日たった一度きりだったけれど、霧彦はもう彼女の事を忘れる事はできないような気がした。

（救ってあげたい、君を……）

二週間後の金曜日の夜、彼はまたミレイと顔を合わせる機会ができた。前回会った時と同じく、優艶そうな雰囲気にも似合わず、少々ラフな恰好をしたピンクのパーカーワンピースに、片手には高級なエルメスのバッグをぶら下げていた。

「また会えたわね。元気にしてた？」

「相変わらずだよ」

今日の夜も、外は悲しみに濡れたような物憂げな秋霖がしとしとと降り続き、辺り一帯を雫の涙で溢れさせていた。

彼女はゆっくりとベッドに腰を下ろす。

そして、ミレイは視線を床に遣りながら、今着ているピンクのパーカーワンピースをこれ見よがしと恥ずかしそうに徐〔おもむろ〕に脱いでみせた。すると、あまりふくよかではないが、幼そうな綺麗な形をした胸が下着から垣間見えた。がしかし、それは、きつとたくさんの男達の手で穢〔よご〕されてしまっているであろう。（僕はこの女に恋をしている……）

霧彦は、淡くスウィートな時間をまた二人で演出できるのが愉しみて仕方なかった。そう、この憐れな年若い娼婦に自分だけの慰めを与えるためにも……

「さあ。そんな長くない時間だけれど、ゆっくりと楽しましょ」

そう言ってミレイはクスツとあどけなく、しかしどこか窺れたような微笑みを彼に向けた。外は悲しみに濡れたように降り続ける雨の中、二人の時間はまた静かに始まった。彼女の傷心を癒してあげようと願うように、霧彦の疲れきった心はミレイの白い身体の中に溶けてゆく。二人は、わずかしかな限られた時間の中で、言葉に表すものなどなく、心地よい興奮の中を共に愉しみながら、そして

……

甘い時間はいつの間にか終わりを告げ、ミレイと霧彦は生温いお湯で再び身体をさっぱりさせた後、一緒にベッドに戻っていった。そして彼は、どうしても一度、彼女の本音を訊いてみたくなり、幾らか声を震わせながら、

「なあ、ミレイ。こんな欲すれば欲するほど自身が汚れていってしまう暗鬱な裏の世界に君が迷い込みんだなんて僕には信じられない。いったい、君の過去に何があったのさ」

「……そんなことあなたになんか関係ないでしょ」

「頼む。教えてくれ、ミレイ！」

霧彦は思わず神経が高ぶり、いつになく声高に叫ぶようにして、堅実な社会から墮落してしまった女にもう一度尋ねた。

「……大学生の時に帰りの夜道、中年の男性二人組にいきなり車に連れ込まれ、山中で犯されたのよ、わたしは……。それから、他の被害者と同じでもう立ち直れないんじゃないかと思うくらいにショック状態に陥ったわ。……でもね、それ以来わたしの心の中には、今まで演じる事の出来なかった別の自分が生まれていたの。それは好奇心を伴って、わたしを曖昧な世界に連れ出していったわ。闇に包まれた街を孤独に彷徨〔さまよ〕う、夜蝶のようにね……。」「言い終わった時、一雫〔ひとしずく〕の涙が小川のように彼女の頬をきらきらと伝〔つた〕ってゆくのがわかった。

ミレイが打ち明けてくれたおぞましい過去の話聞いて、暫〔しばらく〕くの間、霧彦はただただ彼女を遠くから眺めでもするように、じっと目を凝らしているだけであつたが、やがて、どう言葉を掛けていいのかわからずにいた重苦しい沈黙を破り、

「……………そうか。それでも僕は君を救いたいんだ」

「あなたになんかできない、そんなこと。ほつちいてちようだい」
彼女が呆れたようにとっさに冷たく突き返すと、霧彦は真正面を見てミレイの身体を抱きしめながら、ベッドに倒れて俯〔うつぶ〕せになった。

「駄目ったらダメ」

彼とは反対に仰向けになった彼女は、嬌〔なまめ〕かしい声をあげて、恋人にはなれないという事を自分でも承知しているかのよう
に、冷ややかだが悲哀のこもった眼つきで彼を少しの間見つめた。

「頼むから僕の言うことを聞いてくれ。君をこんな薄汚い場所に居させたくない！」

「だからあなたに何が出来るっていうの。私の汚れていなかった過去でもみんな取り返してくるっていうの？」

霧彦は、彼女のためをと思って興奮した物言いになってきたが、ミレイのほうはそうでもなかった。「何でもするさ。傷ついた君を、救い出すためなら……」

「口先だけよ、そんなの。他の違う男にも言われた事あるし、あてにならないわ」

「そんな……」

霧彦は諦めたくても諦めきれず、再び彼女の表情〔かお〕をまじまじと見つめた。“夜蝶”のように、闇に包まれた街の中を悲哀のこもった蠱惑〔こわく〕的な眼差しで、日々のパンを得るため仕方なく、自らの身を道具として孤独に渡り歩いてきた女の守りゆく処世術なのであろうか。簡単に、心を許してくれる筈はなかった。

「何でわたしだけに縊るの。もっと私より綺麗な人他にいないじゃない」

ミレイはけしかけるように言った。

「一目惚れしてしまったのさ、君に……」

しばらくのあいだ彼女は、夕靄のなかに滲む淡い光線のように悲哀のこもった蠱惑的な、か弱い視線を霧彦に投げかけていた。がしかし、

「……………じゃあね、さようなら」

そう、さっと別れの言葉を告げると、ミレイはまるで恋人のようにウインクして、ラフに見えるピンクのパーカーワンピース姿に高級なエルメスのバッグを片手にぶら下げて、静かに部屋を後にしていっ

た。

外は相変わらず、悲しみに濡れたような秋霖が、しとしとと物憂げな音色を奏でて夜の街を支配している。霧彦の胸にもその夜、愛「かな」しみの雫がそつと滴り落ちたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6212g/>

愛しき夜

2010年10月28日00時38分発行